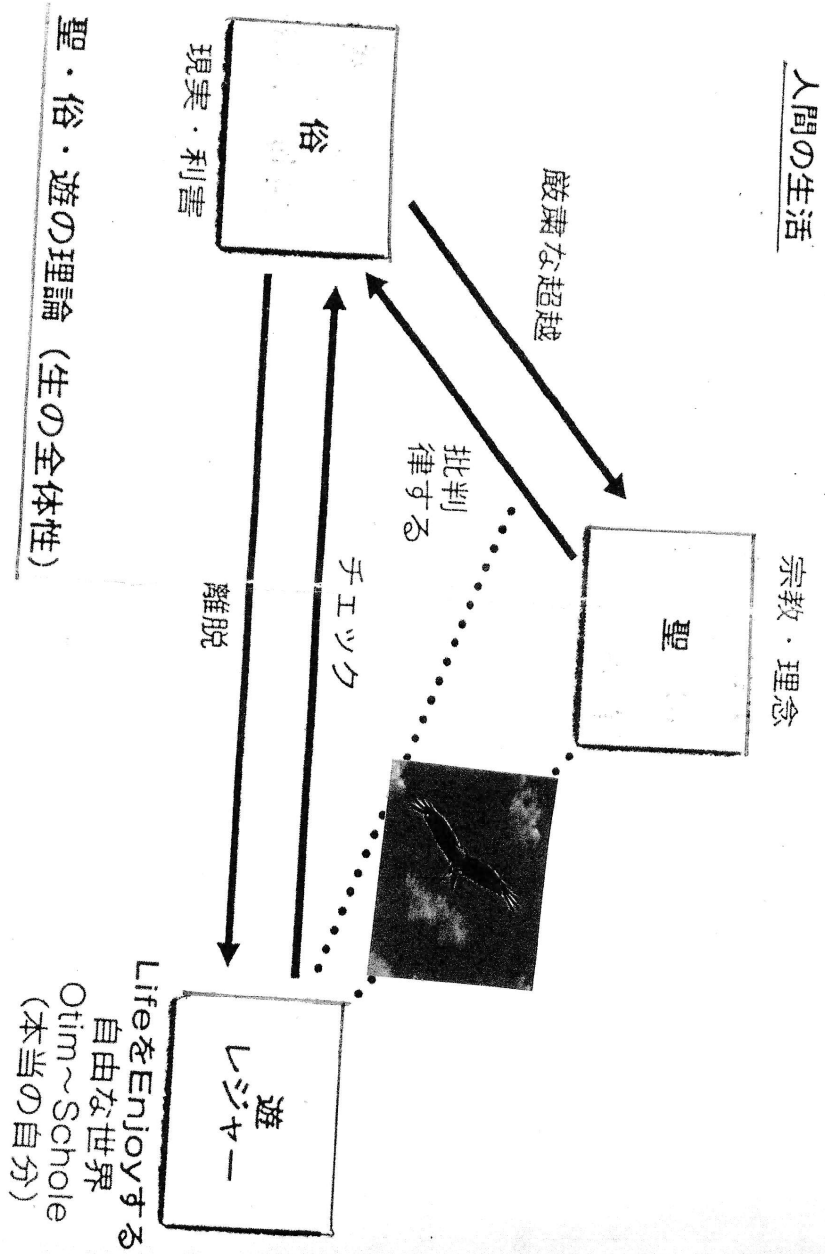


日本温泉文化の精神世界
 ～「いのちの再生」と「共存」をめづって～
 (聖・俗・遊の理論を枠組みとして)



①

「ゆ」と日本人——聖・俗・遊をめぐって——

日下裕弘

神霊やどる古代の「ゆ」(ゆかわみず)から、江戸庶民の「浮世風呂」を経て、現代の「温泉」・「おふろ」に至るまでの日本の「ゆ」の社会史を、聖・俗・遊をめぐり観点から考察し、その発達過程を、世俗化、階層の下降現象等の諸過程としてとらえると共に、今後の「ゆ」と日本人のあり方を、その起源と本質的意味にせまって再考してみたい。

1. 「ゆ」の種類

2. 「ゆ」と日本人の社会史

(1) 聖なる「ゆ」

ア、狩猟時代の古代人と「ゆ」——聖なる自然の恵み

イノシシ、シカ、サル、シラサギなど。

イ、農耕時代の始まりと「ゆ」——禊(みそぎ)

斎川水(「ゆ」かわみず)、水浴、熱水(温泉)浴、探湯、湯立神楽。

ウ、神話、天皇と入湯————医療、養療

医療の神 少彦名命、有馬、伊予、紀伊温泉に歴代の天皇が入湯。

エ、仏教の伝来と「施浴」————信仰、医療

大湯屋、浴室、湯維那(ゆいな)、蒸気風呂。

オ、修験者と温泉————修験道と禊

祈禱壇、火山と女性、温泉の発見と宣伝。

(2) 聖から俗へ(中世)

ア、宮中、公家、武家の「ゆ」——禊の系譜、ステイタスシンボル

御湯殿(自家湯殿)、湯治の日常化、接待風呂(俗と遊)。

イ、施浴の普及————人々の救済、仏法の普及

百日施浴(頼朝)、日本人の入浴愛好の習慣形成。

ウ、戦国の「隠し湯」————治療、療養、軍事制度

エ、寺湯から町湯(銭湯)へ————経済、交換価値

京都の洛中洛外図(洗う風俗)、江戸の浮世風呂へ。

オ、温泉と農民————骨休め

石(いわ)風呂、塩風呂、農閑期の保養、療養、治療。

(3) 俗、遊としての「ゆ」 / 階層の下降現象

ア、江戸の風呂-----命の洗濯（大衆化）、（湯女）

戸棚風呂、石榴（ざくろ）風呂、明治の改良風呂へ。

式亭三馬の「浮世風呂」。風呂敷、浴衣、小桶。再生温泉、薬湯。

イ、温泉の隆盛-----湯治の普及、「遊」化

湯治階層、物見遊山、講、一夜湯治、遊の内容、お土産（こけし、細工）。

ウ、明治以降の「ゆ」-----大衆化、西欧化、資本主義化

銭湯の普及、温泉湯治の一般化。鉄道の開通、洋風旅館、一泊二食付きの宴会型団体旅行、そのホテルだけの生き残り。

エ、家庭の「お風呂」-----家族化、マイホームと家族の一体感

風呂場の小型化、規格化、大量生産化。

オ、日本型クアハウス-----ローマ、中国、ヨーロッパ等のモザイク

カラカラ浴場、桃源郷、漢方励命薬湯、サウナ、ジャグジー、打たせ湯。

カ、総合保養地域整備法-----余暇行政

人間、自然、および経済をめぐる諸価値の葛藤。

4、古くて新しい「ゆ」の意味再考

ア、「ゆ」の醍醐味-----「ああ、いい湯だ」（快感）、湯あがりの爽快感。

イ、折口の遊び説-----「再生」。鎮魂（たまふり）。常世国からいで来た「ゆ」、人はすべて始めに戻る。

ウ、M. エリアーデ-----水は一切の根源、あらゆる可能性の象徴。

エ、E. ノイマン-----母親の子宮。

オ、T. インモース-----「湯立神楽」、「ゆ」=水と火の結婚=火が水の可能性に形を与える=元型、湯花をかける=生命の再生と復活、災厄を防ぐ、安全を守る、作物の豊饒。

カ、聖 俗 遊 カオスの4極構造図式による世界再生の方法（木村洋二）、

「空」？ 「無」？

キ、母なる「ゆ」文化による父なる文化からの離脱、と再生（よみがえり）。

ク、「ゆ」は、日本人の生のあり方を象徴していた。「象徴としての子宮」、

「人間の原点」、「再生」、そうした聖なる部分を失った文化は滅びる。

日本の「ゆ」の「よみがえり」機能は浅くなりつつある。

遊	現代：庶民の湯治（自然治癒力＝非特異的変調作用） 伝統と近代医学の共存をめざして プラス志向のライフスタイル
	明治以降：湯治の隆盛（上流階層から庶民へ） 西欧の温泉医学の紹介、見聞、導入
俗	世俗化 ↑ 卑俗化 商業化 ↑ 遊興化
	江戸時代：中国の「本草綱目」、宜明五気論 湯文、一本堂薬選続編、 養生訓（老荘思想、儒教）
聖	平安・鎌倉・室町・戦国時代： 中国思想（陰陽五行説、十干十二支運行説） 湯治における＜気＞思想の日本化
	奈良時代：仏教、温室教、大湯屋、湯維那、施浴 湯治の習慣、 神仏習合（温泉神社、薬師堂） 農民の湯治（骨休め）
	農耕時代：神話における医療と温泉の神（大己貴命・少彦名命） 禊としての湯、探湯、湯立神事
	縄文時代：森の文化（共生と循環）、アニミズム、 湯＝自然＝神霊、鳥獣伝説、など
	日本の風土：火山と水、モンスーン（春の新緑、夏のむし暑さ、秋の紅葉、 冬の寒さ、など）、 世界一の温泉分布

図 | わが国における湯治思想の「重層的混淆」構造*

※ 図 | は、わが国の湯治思想をめぐる歴史的展開を、年代の古いものから新しいものへと階層的に整理したものであるが、それぞれの年代における思想はその源流を異にしつつも、それらがわが国における湯治を正当化する理念として採用された時点では、「寿の価値」すなわち、「いのちの再生」という一貫した基調的意味をもって顕在していること、しかも、新しい理念を取り入れた場合には、それぞれの湯治思想を矛盾なく、あるいは、それぞれの思想的源流に遡ってその基本的枠組みを批判的に検討することなしに習合し、古い理念をその思想的基盤の深い層に順に沈殿させ、いわば一種の「錯綜体」（市川浩、1992年4月）として機能させながら、「重層的な混淆体」として潜在させていることを示している。したがって、表現上、モザイク図として提示してある。

新・湯治とは？

多くの人が「好き」と答える温泉。ただ、今の日本は、その本当の魅力に触れていないのではないのでしょうか？ 温泉地には、温泉だけでなく多様な自然、歴史・文化、食など様々な魅力が詰まっています。新・湯治とは、平成29年7月に有識者会議により提言された、現代のライフスタイルにあった温泉地の過ごし方の提案です。新・湯治は、多くの人が温泉地で地域資源を楽しみ、滞在を通じて心身がリフレッシュされ、そして温泉地を多くの人が訪れることで、温泉地のにぎわいを生み出していくことを目指しています。

新・湯治



で検索

古くからの温泉地に長期滞在し、入浴して病気を治療する「湯治」

団体旅行としての温泉地の発展
療養や保養の場としての衰退

元気になれる温泉地での様々な過ごし方



問い合わせ先

環境省自然環境局自然環境整備課温泉地保護利用推進室 onsen@env.go.jp

日本の自然遊「ゆ」の習慣

「いのち」の「共存」

1 動機と目的

日本思想の重層性と個性（道教、神道、仏教、儒教、西欧、．．． アイデンティティ）
カイヨワの遊びの4分類ではとらえきれない日本の遊び――「ゆ」の遊び。

本研究は、歴史を通じてわが国の代表的な遊び文化のひとつである「ゆ」（湯浴）の
人間的意味を、その源流にさかのぼって考察すると共に、世界に誇る日本の「ゆ」独自の
文化的特性を明らかにすることを目的としている。

2 「ゆ」の概念（水＋火、「ムロ」＋湯槽、温泉＋風呂）

水＋火＋土

3 日本の「ゆ」の源流

（1）温泉は、人類史以前から

（2）記録に残された古代の「ゆ」――聖なる「ゆ」・「水」――

原始インド人の沐浴。ギリシャの泉の守護神ヘラクレス。エジプト・ナイルを聖なる川として。
キリスト教30社による福音書（水による洗礼）。トルコ（回教）の格言「、――心まで洗え」。
サモア。バリ。台湾。日本の禊、探湯、湯立神楽、温泉による小彦名命の蘇生（伊
豫風土記）、海中にて身心を清める（魏志倭人伝）。

（3）古代世界における「ゆ」文化の東西交流

（ローレンス・ライト、中桐確太郎、藤浪剛一、橋本峰雄）

BC. 5000-BC. 2000――スキタイ（ヨーロッパとアジアの間・黒海北岸）式蒸気浴が北に延び、
東西に別れた（東――北アジア、北米アラスカ、エスキモ、アメリカ・インディアン。ロシア式蒸
気浴、朝鮮の「汗蒸（はんじム）」、日本の石（いわ）風呂。 西――シベリア式蒸
気浴、フィンランド式「サウナ」）。

BC. 2500-BC. 1800――インダス古代都市の共同沐浴場。

BC. 2000ごろ――シリア・マリの宮殿の浴室、クレタ島女王の浴槽。

BC. 1350ごろ――古代エジプト・アマルナ遺跡の小浴室。

BC.500ごろ-- 古代オリエント・メソポタミア時代の浴室。

BC.300-AD.300--匈奴（スキタイ文化を受け継いだモンゴル高原の遊牧民）の東西移動。

ギリシャはエーゲ文化から沐浴を学んだ。スパルタの冷水浴。ヒポクラテスは沐浴を医学に。

ギリシャ人の温泉浴（オリーブ島の硫黄泉）---BC.200ごろのヘレニズム文化（エピキュロス「独楽」）の東伝。

ローマの「ゆ」文化---カラカラ浴場、ディオクレティアヌス浴場（北ヨーロッパ中世の沐浴。アフリカやアラビアに伝播し、「トルコ風呂」として復活。）

西アジアの「ゆ」文化を十字軍が中世ヨーロッパへ。

AD.700ごろ--唐の玄宗や楊貴妃が行幸した温泉。

日本の蒸風呂の起源を「シルクロード」上のどこかに夢想する（橋本峰雄）。

4 自然遊としての日本の「ゆ」文化

世界共通---聖、医療、洗浄、快（単純な皮膚感覚）。

どこかが違う日本の「ゆ」の習慣（バトマス・プラティック）---熱い湯に首までつかってゆったりと「ああ、いい湯だな」（習慣的身体の層における深部感覚）。

西洋---実用的、手段的、支配的、自然科学的、部分的

日本---感覚的、自己目的的、「ゆ」への信頼感、天真な享楽、空っぽ、全体、
---「自然遊感覚」

(1) 日本の風土---火山国、豊富な温泉、湿潤、夏の蒸し暑さ、冬の厳寒、

(2) 仏教思想と日本の「ゆ」

仏教の「仏説温室洗浴衆僧經（温室經）」---中国の安世高が訳す---8世紀ごろ日本に渡来---「七物を持てば七病を除去し七福を得る」（沐浴による疾病の予防と治療、洗浄による心身の安寧、外見の端正・清潔、内なる心の幸福、社会的尊敬）。

「釈氏要覧」の「身を洗う、語を洗う、心を洗う」。釈尊を始めとする聖僧の入浴。

「無量義經」。「聖無動經」。

「教誡律儀簡釈」---入浴に際してのルール（長老を敬し、道具の整頓、脱衣の心得喧笑や水の汚染の禁止などの厳戒。作法上の制限、修業を怠らないようにとくぎをさす）---仏教の儒教化

浴堂は、七伽藍のひとつに加えられるようになった（中国のものがモデル）。

温泉による民間療法、湯治日数の1回り7日は法事の単位。

<江戸期における仏教思想の世俗化、卑俗化、身体化、感覚化>

仏教のコスモロジー：一即一切、色即是空・空即是色、非連続の連続、「うき世」の思想。人：ミクロコスモス（内なる「気」）と湯：マクロコスモス（外なる「気」）との融合。常世の国から湧き出ずる温泉、それは、日本古来からの「生まれかわり」の信仰と、自然との「共生思想」とを象徴している。「ゆ」は、意識活動の低下を通じて、人間の原点である身体をしてその自然性を表わしめる。「ゆ」につつまれて「空」・「無」の入口に座る。自然の状態に受動的に「なる」。

(3) 道教――荘子の逍遙遊――と日本の「ゆ」 対

自然の摂理(いとわり)

水は、その無為性、受身性、自由性において「道」のシンボルである。「道」とは無為自然、母・子宮内の胎児のイメージ、自然との共存、非暴力。老子の道は、修練・修業・「行」。だが、荘子の道は、より自然・非人工的。

荘子の逍遙遊――何ものにもとらわれることなく、自然の「気」とびったり調和して、自由の境地に遊ぶこと。斉同の理（差別なきこと）をしり、俗と知識の拘束を越えた「坐忘」の境地。



しかしそれは、単に無反省な即自的な欲求充足の行為でもなければ、今日的な意味での世俗化された play や leisure とはまったく異なり、徹底して世俗の外に離脱する厭世思想である。

したがって日本の「ゆ」は、あの世とこの世の間である「うき世」の事象にとどまるかぎりにおいて、逍遙遊に結びつく。

(4) 自然遊としての「ゆ」

それは、人為を包み込み、のみ込んで、人為を溶解してしまうような自然である。自己が無になることを通じて自然があらわになる、自然において自己がおのずから無になる。それは、原自然への私意なきかわりである。日常を離れ、自然なる「ゆ」に身をゆだね、無為の遊に逍遙する。身体が自然にそれを知る。

自然への信頼感――それは、安らかな魂・心の平静が、自然の「気」を肌で感じ、極楽浄土を予感する自然観である。神との交信。

フローの出発点――チクセントミハイのフロー理論との関連でいへば、「ゼロ・フロー」、即ち、文明病（人間的不自然）から原点（人間的自然）への、正常以下から正常（健康）への復帰、とはいえまいか。

5 結 論 : 日本の「ゆ」のかくれた形——文化原理・価値原理、習慣(変質)——

エイドス

「ゆ」の文化原理——あの世とこの世の連続(「うき世」)、^{いのち}内なる「気」と外なる^{いのち}「気」との融合、湯の身体への「にじみ」:「ゆ」においては、これらが自然に帰一する。それは、自然と人間との共生・共存を軸とする日本の根底的な文化原理である。

エトス

「ゆ」の価値原理——日本の「ゆ」の文化史に一貫して流れていた基本的価値は、「再生(よみがえり)」であった。それは、生命と元気の再生でありつまるどころ「寿」の価値である。寿の価値は、日本の「ゆ」をめぐる諸価値に統合をもたらす基本的原理である。

ハビトゥス・プラティク

<「ゆ」の 習 慣 >

『世俗を離れてのんびりと、熱き湯に首までどっぷりとつかる。湧き出ずる湯が肌を包む。煩わしいことは何もない。意識を空にして湯に身をゆだね、ふわっと「なる」。周りの風景や植物も、湯も、そしてわが身も、同じ自然態で、ひとつである。「ああ、気持ちいい。いい湯だな!」』

それは、日本人の身体の深い記憶であり、自然への信頼感が生んだ「なる」哲学であるといってよい。日本の風土と思想、そして湯の「快」が醸成してきたわが国の「ゆ」の習慣には、おのずから現成するという、自然の「執拗低音」がある。それはまた、仏教や道教(逍遙遊)の日本的修正・卑俗化であった。湯の「気」と一体となり、「うき世」に逍遙する。それは、日本人が世俗の垢をおとし、人としての原点に戻るための庶民のささやかな知恵であり、楽しみであった。この「空っぽ」を卑俗化した遊びと呼ぶならば、そこでの「空」は、さしずめ、仏教や道教における「空」や「無」や逍遙遊への「入口」に、そして、フロー図式における原点(出発点)にあるということではできないか。こうしたわが国の「ゆ」の習慣は、日々の西欧化された身体的実践を通じて、いやおうなしに、その表層から徐々に変質してはいる。だが、日本の「ゆ」の「自然遊」としての本質が忘れ去られることはないだろう。

かくれに精神世界

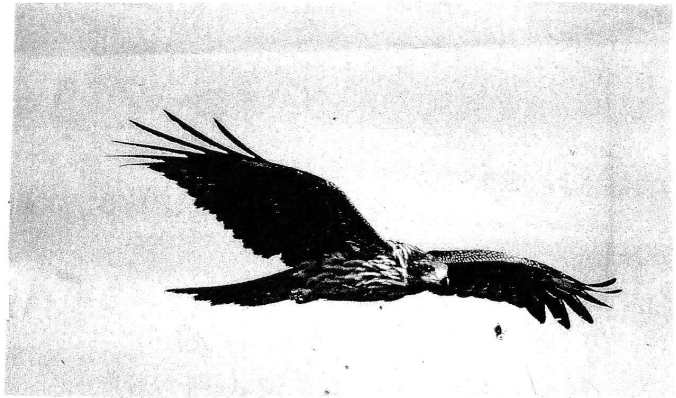
～Xモ～

(資料1) 逍遙遊について

莊子 (内編)

第一 逍遙遊編

・大鵬――



「万物斉同」

「修行による自然との一体化」

「道 (タオ)」への「帰一」、自然の摂理に一致した「生き方」

(資料2) 自然治癒力について

わが国には、「民間療法」として昔から湯治が行われていたが、こうした日本の湯治における「ゆ」と身体メカニズムを湯浅流に解釈すれば、

- 「ゆ」の「皮膚感覚」→
- 「深部感覚」・「内蔵感覚」→
- 「交感神経」と「副交感神経」のはたらき→
- 緊張と弛緩のバランスの回復 →
- 呼吸器 (肺)、循環器 (心臓)、消化器 (胃腸・肝臓) といった内蔵の機能回復 →
- 「自然治癒力」の増進 (「生命力」の再生)